

中学校「道徳科指導法」の基礎基本

～道徳科の目標にかなった授業を行うために～

後藤 忠

1 「教材選択」の基礎基本

- (1) 教材は生徒の内面を映す鏡であり、生き方の糧となるものでありたい。教材は道徳科の「命」！
- (2) よい教材は生徒の心を鮮明に映し出す。反対に、よくない教材は生徒の心を何も映さない。よくない教材を使っていくら工夫しても、よい授業にはならない。
- (3) よい教材とは、「ねらいに合っている」、「分かりやすい」、「興味関心がもてる」、「臨場感がある」教材のことをいう。なお、授業者が惚れた教材は間違いなくよい教材といえる。
- (4) よい教材には、生徒の①道徳的価値理解と②人間理解と③他者理解を深めるためのエキスがたくさん含まれている。
- (5) よい教材は教師の目と心で探す。
- (6) 同じ題名の教材でも、中味はいろいろ違う。内容や文章をよく吟味し、授業者が最もよいと思う教材を選択する。

2 「教材提示」の基礎基本

- (1) 教材提示はやり直しがきかない 1 回きりの真剣勝負である。ただ 1 度の教材提示で生徒の完璧な教材理解を凶るという覚悟で教材提示を行う。
- (2) 生徒の心に届く教材提示を工夫する。
- (3) 教材提示は間(ま)が大切である。(生徒はその「間」の中で言語(文字)情報を映像に変換する。「間」のない教材提示は NG) 教師は事前に教材を何度も読み、その「間」を習得する。
- (4) 教材提示に命を懸ける！

3 「発問」の基礎基本

- (1) 発問は生徒の思考を深める重要な鍵(きっかけ)である。
- (2) 原則、一人の登場人物 A に絞って発問構成をすると授業は深まる。(その A には、迷い、悩み、後悔し、奮起する…など、人間くさい登場人物を選ぶ。立派すぎない方がいい。)
- (3) 主な発問は 3 つまで。
- (4) 発問構成には教材分析(場面分析と内面分析)が不可欠である。
 - ① 登場人物 A の内面(気持ち、思い、考え、心の動きなど)がデリケートに変化するところで場面を分けていく。(ピンポイントの発問は考えやすく、話し合いもよく噛み合う。) ←場面分析
 - ② 各場面の A の内面をすべて書き出す。(すべて書き出しておけば、授業中の生徒の発言は全て想定内となり、構造的な板書計画にも生かすことができる。) ←内面分析

- ③ Aの内面が「本時のねらい（目標）」に最も強く、最も深く、最もピュアに迫る(満ちている)場面（**中心発問場面**）を一つ選ぶ。
 - ④ 中心発問場面でねらいに迫るために欠くことのできない場面（**基本発問場面**）を二つ選ぶ。
 - ⑤ 選んだ3場面のAの内面をさらに検討・分析し、充実する。
 - ⑥ 内面分析した各3場面のAの内面が生徒たちからすべて表出される問い方を工夫し、推敲、吟味してシャープな発問を作る。
- (5) 発問は教材の「行間」を問うもので、教材に書かれていることは問わない。発問する場面は**教師**が端的に押さえてから発問する。

(6) **望ましくない発問**

- ◇ 教材の事実を問う発問（NG：誰が出てきた？ それからどうした？）
- ◇ 発問の言葉がよく吟味されていない曖昧な発問（気持ち？ 思い？ 考え？ …）
- ◇ 発問の意図が分からない発問
- ◇ 本時のねらいや指導内容に沿っていない発問
- ◇ どこの場面の何を問われているのか分からない発問
- ◇ 発達の段階や個人差を考えていない発問
- ◇ 「なぜ？」「どうして？」「なんで？」など、理由を問う発問（生徒の心情に深く入り込まず、答え探しに走らせてしまう）
- ◇ 「もし君がAだったら…」という発問（教材を使って行う道徳科の学習の特質を損ねる）
- ◇ 補助発問が用意されていないもの

4 「話し合い活動」の基礎基本

- (1) 話し合い活動＝**聴き合い活動** である。聴き手のリアクションにこそ話し合い活動の意味がある。
- (2) 日頃から聴き方の指導を丁寧に行う。（人の話は**目と耳と心**で聴く）
- (3) 話し合い活動（聴き合い活動）を通して生徒は、
 - ◇ 自分の考えの曖昧さに気付く
 - ◇ 自分の考えがはっきりしてくる
 - ◇ 自分の考えと他の人の考えの違いが分かる
 - ◇ 自分の考えが強まる
 - ◇ 自分の考えが変化する ⇨（このことはめったに起こらない。だから変容は期待しない）
- (4) 生徒一人一人が自分の考えをもって話し合い活動に参加できるよう配慮する。
 - ◇ 一人一人が自分の考えをもつ時間を十分確保する。（特に、第1発問が重要）
 - ◇ 挙手した生徒をすぐ指名するのはNG。
 - ◇ 第1発問の第1発言者をあらかじめ決めておくとよい。（意図的指名）
- (5) 話し手は「聴き手の方を見て話す」よう指導する。

5 「書く活動」の基礎基本

- (1) 生徒の考えは話し合うことによって広がり、書くことによって深まる。
- (2) 書く活動は1度だけにする。(書く活動には時間が掛かる)
- (3) 書く時間は少くとも5分は必要。
- (4) ワークシートの大きさは書くことに困り感をもっている生徒に合わせる。小さい方がよい。(B6判くらいがいい)

6 授業に臨む教師の「身構え」と「役割」

- (1) 教師も人間として発展途上中、生徒とともに自らも伸ようという気持ちで授業に臨む。
- (2) 生徒の思いを受容的に、共感的に、肯定的に、待つ、聴く、受け止める。
- (3) 生徒とともに考える。
- (4) 生徒の考えを整理する。(板書などで)
- (5) 生徒の考えを広げる。
- (6) 生徒の考えを深める。
- (7) 生徒の学習を支援する。
- (8) 生徒に学ぶ。